

平成24年度臨床研究テーマ成果報告書

診療科（部）名：顎口腔機能治療部
研究期間：平成23年4月～継続中
研究課題名：唾液量および嚥下頻度と胃食道逆流（GERD）の自覚症状の強さとの関係についての研究
研究課題の概要及び成果： <p>GERD 症例において、唾液嚥下による食道運動の促進や酸中和作用が症状を改善させることを示唆する報告がある。このことから、唾液量や嚥下頻度の減少が GERD の一因となる可能性が推察されるため、本研究では、それらの因果関係を明らかにする。</p> <p>口渇を主訴にドライマウス外来を受診した症例ならびに健常成人を対象として、唾液分泌量ならびに嚥下頻度の多寡による GERD の自覚症状の強さの変化を調査した。GERD 自覚症状の強さについては F-scale を使用した。症例数は、昨年度の 34 名から 63 名に増加した。</p> <p>その結果、唾液量の少ない群（安静時唾液量 1.5ml/15 分間未満の群）は、多い群と比較し、有意に高い F-scale スコアを示した ($P<0.05$)。特に、F-scale の中でも酸逆流に関する自覚症状を強く感じる傾向にあった（少ない群の平均点 Total:9.6, 酸逆流スコア:5.1, 運動不全スコア:4.5； 多い群の平均点 合計点:5.3, 酸逆流スコア:2.5, 運動不全スコア:2.8）。</p> <p>嚥下頻度に関しては、少ない群（17 回/30 分間未満の群）は、多い群と比較して高い F-scale スコアを示したが、有意差は認められなかった（少ない群の平均点 Total:7.2, 酸逆流スコア:4.0, 運動不全スコア:3.2； 多い群の平均点 合計点:5.9, 酸逆流スコア:3.1, 運動不全スコア:2.8）。</p> <p>本研究の結果から、唾液分泌の低下は GERD 症状悪化の原因となる可能性が示唆された。この結果は、GERD 症状改善に関する新たな治療法開発の一助になる可能性が考えられた。</p>
上記概要・成果に関連する図表等